

はじめに

ご紹介いただきました、板楠です。どうぞよろしくお願い致します。

じゃあ早速、今日用意しましたレジメは6枚ほどで、ほとんど漢文がびっしりでちょっとビックリされたんではないかと思いますが。

この時代の資料は、まだ平仮名とかカタカナがまだ十分に普及しない以前、日本のあの支配者層はですね、全部中国語の読み書きが出来まして、国の歴史自体も実は中国語で編纂をします。それを私たちは、「古事記」とか「日本書紀」とか呼んでおりますけど。ここに副題でですね、「鞠智城の謎」とともに「白村江の戦いと律令国家の形成」というタイトルを付けさせて頂きました。

1.白村江の敗戦と肥後

実はあの、古代の鞠智城が出来た頃は、私どもが今日本と呼んでおりますこの国自体が国家というまとまりをしつつあった時代にも相当するその時に経験したのが外交上の大きな事件、白村江の戦いということになります。

まず一番 No.1 の資料を白村江の敗戦と肥後というふうにしてしておりますが。その白村江の戦いなるものがですね、どういう戦いかをちょっとあの HP 用意しましたので資料と合わせてご覧になればと思います。

場所的に言いますと、あの朝鮮半島を舞台に古代史が展開しておりまして新羅、朝鮮半島の南の方を新羅と呼びます。それに対して左側を百済と言います。その上の方に高句麗という国があって、実は朝鮮半島は現在も南北に分断しておりますけど古代もやはりこういうふうですね、民族が入り乱れて、しかもなおかつ、高句麗の左隣には唐という7世紀以来強大な力をまとめまして、律令と呼ばれる法律でもって、あの広い国土を治める律令国家のお手本になった国が、実は唐なんですね。そこに、実は、この白村江と赤い鍵印を入れてる大雑把な地図なんです

そもそも何故、我が国が朝鮮半島まで出かけて行って、ここで戦ったのか。その戦いの相手が新羅なんです、本来は。この3つの国をなんとか統一したい、という悲願をもって高句麗、百済、新羅は入り乱れてずっと長い間戦いを繰り返します。

それであの地域で多いのが山城なんです。朝鮮半島では、その戦いのさなかに巨大な山城を造って、そこで逃げ込んだり攻め出したりして、お互い統一をしたいと激しく入り乱れた攻防戦、その中で新羅がですね、まず優勢になって百済を、この白村江の戦いの前年滅ぼしています。百済王朝は滅亡しておりまして、当時は大和と呼ばれている畿内の政治権力、大和政権と非常に外交的に仲が良かったのが百済です。いろんな文化的現象が百済を通じて来てますが、新羅とは大和政権はあまり上手いかないんですね。

それで百済は滅亡した時にわが国に援軍を求めて王朝をもう一度復興したいという事が今日の No1 の天智天皇二年のですね。663年の白村江の戦いの記事になっている訳です。出典は日本書紀です。日本書紀の、厳密に言えば天智天皇はまだ即位しておりません。母の斉明天皇が亡くなった後、中大兄皇子という名称のまま母親の意思を継いで全然指揮を執っていた時期で、後に日本書紀が編纂された時に既にあの天皇の名前で入れているんですが、ちょっと行きます。下にありますが、大韓民国フヨ、白馬江の流れと書いてありますが。場所はどこかと言うとですね、韓国の地図で探すと今錦江、

錦の河と呼ばれている大きな河があってどうもその支流あたり。一部分を白馬江とあちらでは呼んでいたようで記録では白村江と白馬江なんですけど、白い村の河というような名前と呼んでいます。そういう流れ、向こうの写真をちょっとあの入れておきました。でですね、挙げております。

一番上の資料だけはちょっと読み下しを大きく拡大してます。「大唐の軍曹船戦百七十艘を率いて、白村江連なれり、大和の船戦のまずいたるものとだいとうの船戦とあい戦う、大和負けて退く、大唐すなわち左右より船を挟み囲みて戦う、時の間に見戦我が大和軍敗れぬ、水におもむきて溺れ死ぬ者多し、じゅくろですねこれを開戦する事得ず」船を戻すことがほとんど出来なかったという、短いんですけど日本書紀ではその白村江の戦いで日本が負けた有り様をたったこれだけでしてあります。原文はそこに挙げてある通りですが。

参考までに、これを相手側の記事ではどういう風になっているか、というのを挙げておきました。韓国側の資料「三国史記」ですね。「これ新羅の文武をりゅうさくさんねんじょうに和国の船兵来たりて...百済を助く、和船せんつつを留まりてはくしゃにあり」、というふうにですね。倭の軍隊は海を越えて行った訳ですから、向こうの記事では、千艘あまりがああ白村江のあたりに集結をしたような記事があります。一方「くとじょ」と読みます、唐王朝の歴史の一つなんですけど、唐軍、新羅はその唐にですね援軍をたのんで、唐と新羅が連合軍を組んで、日本から出発をして百済を助けたいという我が国の軍隊を挟み撃ちにしたわけです。劉仁軌が唐側の総大将の名前で、劉仁軌の水軍が白村、これですね日本書紀では白村江になってますけど、白い江の口というふうに中国側の記録ではなっていたんですけど、倭兵と遭遇し、その船 400 艘を焼く。

3つの資料を付き合わせて、ほぼこの戦いで我が国の軍勢が負けたという事は事実かと思います。それが一番目の最初の資料で、二つめの日本書紀のですね、持統天皇下図の上分を肥後の国とこの戦いが関係あったのかどうかを見るために、あのちょっと挙げておきました。資料の方をご覧頂きたいと思います。どういう資料かという、返り点をちょっとこの文章つけておりますので。

「以迫大貳」、これは当時の位です。「以迫大貳 伊予の国の風速郡の物部薬と」肥後の国のこれを「ごうしぐん」と呼んでください。皮石郡の壬生諸石とにさずく、並びにですね、人ごとに足衣四匹、これは絹織物の種類です。足衣四匹と糸とあるのも絹糸です、絹糸十く、布これはおそらく麻布だと思います。二十端で、鎌を二十口、稲を一千束、この単位になっている「そく」というのは「束(たば)」ですよね。で、両手で、が当時稲を数える単位だったんです。千束、水田を四町、だいたい皆様方は広さがお分かりになる年齢だと思います。もうあの若い学生達は全然分からない単位なんですけど、四町も広い面積の水田がこの二人に与えられてるんです。

更にですね、この貢ぎとえだちを復す、これはその人が属している家族の貢ぎ物という税金、特産物の税金と、えだちというのは力役です、労働力で税を払う、それも家族の人免除されている。なぜかというのが短いんですけど、あの非常に生々しいんですね。久しく唐地に苦しむを慰める。ちょっとすいません。ここ返り点が間違っています。意味としては久しく唐地に苦しむを慰める、そのためにこういう厚い褒美がなされたというんですね。計算をして頂くと、前の 663 年からこの記事は西暦 696 年ですから約 33 年後の記事です。

つまり、あの戦いで大敗北を記して、ほとんどの船が沈没したりして、日本に帰ってきた。いわゆる敗走して帰ってきた中大兄皇子以下の軍隊もあったんですが、戦死しなくても中には捕虜となってそのままですね、あの朝鮮半島のみならず中国の唐までも連行されて、いわゆる抑留生活を送った兵隊がいたという事です。その中に肥後の国から従軍していた壬生諸石が含まれているという事は、あの遠い朝

鮮半島での白村江での戦い、もうこの 663 年の時点でも肥後からちゃんと徴集をされて軍隊の中に参加した人物がいるという事ですね。だから、今日の大きなテーマの一つ白村江ですが、決して朝鮮半島でのよそ事の戦争ではなく、九州のおそらく各地、同じように働き盛りの男性達が従軍して、しかも敗戦ですから、多分大きな犠牲を出したんではないかと思います。

参考までにこの表はですね、壬生諸石と同じように、実は日本書紀や次に編纂された国の歴史書を「続日本記」と言うんですけど、そういったものを調べてると何人が 30 年以上、早い人はすぐ帰れてるんですが長い場合 30 年以上かけて、どういう訳か非常に運よく日本の自分の国に帰ってきた事で、朝廷から非常に厚くされたという例がですね、諸石の他にもこのようにあります。

で、注意して頂きたいのが出身国のところですよ。わずかの資料なんですけど歴史の研究をする者はこの出身地を非常に注目するんですね。筑前、筑紫、筑後、伊予、肥後、讃岐と次、陸奥というのに印を付けて頂くと例外に一例であとは筑後、伊予、備後、大雑把に言いますと、一例を除けばほとんど西日本、畿内よりも西側の中国、四国、九州の出身者なんですね。ここからあえて言いますと、白村江の戦いで出陣していった主力の軍勢は西日本から徴集されていた可能性が非常に高いのではないかというふうに思います。

2.敗戦後の対策と朝鮮式山城の築城

それで戦いの敗戦も非常に傷が癒えていないのに、もう一つ当時の指導者達が対策を執らねばいけなかったのがその火事に乗じて唐と新羅の連合軍がですね、今度は百済を滅ぼした後、その同盟国であった我が国に対しても攻撃を仕掛けてくるのではないかと。その侵攻作戦に対してなんとか対策をとらねばならないという事が当時の指導者の課題だったと思います。

この HP の地図よろしいでしょうか？まず九州の地理的な関係を頭に入れて頂きたいと思うんですけど。ここに水城、水の城ですね、あの地名、今、土手が残っておりますから通られた方もいるんじゃないでしょうか。で、その前のこの沿岸部、もし唐と新羅の連合軍がやってくれば当然この海岸部にやって来て、当時までですね大宰府の前身になる役所はこの博多地域にあったと考えられているんです。ですけど総攻撃を受けやすい場所ですから、水城を造ってこの大宰府をその背後、現在のあの太宰府天満宮があります位置にまでですね下げて、現在のとふおうしあのある場所に移ったのは、この戦いがきっかけではないかと考えています。その前面の守りが水城で、そしてこの大宰府まで敵が侵入した時に、役人たちが付近の住民たち一緒にですね、逃げ込むために造られたのが、背後にあるこの大野城、古代の城、城っていう突然話が入りますけれども、非常に規模の大きい城が歴史上いくつか登場するんですね。この大野城も、この白村江の敗北後にこの九州の守りを固めるために、特に大宰府というあの中心的政治拠点を守るために造られたのが大野城だったと思います。

それとですね。その前面から進軍してくると、水城で止めて大野城で逃げ込んで、もうひとつ考えておかなければいけなかった事、実は肥前の方を回って侵攻してくるかもしれないという、海からの攻撃というのは当然そのルートがあるんですね。そのため、こちらの有明海のほうを通して、もし筑後や流域に上陸した軍団をどうするかという大きな問題があって、その侵攻してきた軍をそこでストップと言うんでしょうか、基肄城というのは大野城と並んで記録に出てくるんですが、地理的な関係で確かめて頂くと大宰府の背後の守り、前面を水城と大野城で背後からだと基肄城で、もうひとつこの地図には入れておりませんが、ここに朝倉橘広庭宮というのがですね、中大兄皇子の母親でありました斉明天皇が九州までその軍勢を率いて出陣してきた時に、一時駐在して体制を整えていた場所ですね。斉明

帝、女帝ですが、ここで亡くなって、中大兄皇子が母の意志を継いで白村江の指揮を執っているんですが、鞠智城は更にこの背後になるんですね。謎の一つです。

いくつか謎をレジメに書いてありますが、こういう状況から見ますと、唐・新羅の連合軍が海岸部からやって来る時に大野城の場所も基肄城の場所も納得できるんですけども、大宰府に侵攻しないで果たして背後の肥後のですね、しかも、菊池川上流の菊鹿町まで来るかなという、その所が鞠智城というのはほぼもう菊鹿町の米原台地に想定しておりますが、位置的な問題として謎が1つ残っております。奥まった所に築城されている理由っていうのが大野城や基肄城と同じレベルで考えてもいいのか、という非常に問題がありまして、それでちょっといきましょうか

次の資料はまず絵で確認下さい、資料は簡単なんで。1ページの一番下の方ですね。日本書紀の天智天皇三年、この年条、對馬嶋、壹岐の嶋、筑紫の国に、唐においてですね防ぐという字とみね、防ぐというのはおそらく防人のことです、防人と呼んでください。与えるという字はですね、この場合は「と」、「何々と」という意味ですから防人と。次は「烽」という字ですけど。烽火台、対策がまず最初として防人と呼ばれる軍人と、見張り台、連絡用、進軍があった時にいち早く、大宰府や地方の畿内、飛鳥まで連絡をするための装置の烽火台の設置をされた。また、筑紫においては大きな堤を築いて水を貯えて、名付けて水城という、これはいわゆる現在地名で残る水城なんですね、これが発掘調査で確認をされて復元想定図になった水城です。今の土手だけ見てるとちょっとこんなイメージ湧いてきませんが、実は下に水がどうやって張られたかも書いてありますが三笠川という川とですね、この土塁の下は通じておりまして、その水をひいてこの全面に博多側の方向に水をたたえている博多湾に上陸されて、もうほとんどですね防御施設が無いんですね。だから大宰府の前面で、まずここで防ぐというその施設です。

文章では1ページの一番下になっています。それと1ページの上の方にですね、豊後風土記と肥前風土記に見える烽火という表をあげております、それはどういう事かというんですね、当時どこに烽火が置かれたかそれを知る手掛りとして参考までに挙げておきました。

例えば、豊後側は豊後大野郡に1ヶ所、海部郡に2ヶ所、大分郡1ヶ所、速見郡1ヶ所、まあこういうものなというぐらい、各郡大体1ヶ所づつ、これはですね、海の方に敵が見えたら大宰府に多分届くようなルートが見易い所に置いているんですね。それに対して肥前の方、現在の長崎県と佐賀県なんですが。基肄郡が1つ、これはですね、基肄というのはさっき基肄城とお話しましたが、鳥栖、今のあの鳥栖一帯を当時は基肄郡という律令国家では呼んでおりまして、山の事も基肄の山と呼んでいたんじゃないかと思いますが、基肄郡に1ヶ所、小城郡に1ヶ所もうお解りかと思いますが。この有明海側ですね。

それに対して、松浦郡、いわゆる唐津市などがあります玄海灘方面は8箇所もの烽火台が置かれています。これは、玄海灘側沿いにですね、大宰府に一直線に連絡ルート、それに対して藤津郡1ヶ所、分かりますが、彼杵郡3ヶ所、これはですね現在ハウステンボスなどがある所なんで、こんなところに3ヶ所もの烽火台かですよ。それに対して高木郡も5ヶ所、高木郡というのはこの熊本から言いますと、雲仙が見える島原半島一帯設置されていた郡でして、あの場所に5ヶ所もの烽火ということは、先ほどあの紹介した地図と引き比べてご覧になると分かるんですね。

やはり、この有明海方面にももしも敵船が進入してきた場合は、本来は玄海灘から博多湾に行くはずなのが、でも、こちらに来る可能性も想定した上で、烽火台もこんなに筑後川に上陸作戦があった時の事を考えているのではないかと。ですから、菊鹿町の鞠智城もですね、言わば作戦的にはこちらの方を警戒するために関連するお城というふうに考えられない訳ではないんですけども、それにしてもちょっと

ですね、奥まった場所です。

ちょっとじゃあ続けます。これはですね、ご存知かと思いますが、博多湾沿岸にあった役所が現在の太宰府天満宮の近くと言いましてもちょっと離れてますが、都府楼というこういった碑文が建っておりましてこれお見せしたいのは後ろの山です、これが大野山と呼ばれていて、この山全体に石垣とか土塁で防御ラインを作って入り口は門だけに限る、そういう囲い込んだ山全体が、今日のテーマの古代の山城、スケール、ちょっとお分かり頂けましたでしょうかこの背後山全体がいざとなればあの住民の人達も役人達も含めて逃げ込めて、食料も武器もここに貯えて半年なり1年間ですね、相手から囲まれても戦えるような、そういう施設が古代の山城であります。近世の見事な天守閣を持つ城とはちょっとイメージが違って、スケールは大変大きなものだったという事をお分かり頂きたいと思います。横には参考までに現在発掘調査で確認されている、その大宰府の政治の中心だった政庁の建物がどういうプランであったか、分かりにくい図面ですけど、当時の役所は大体飛鳥や、後には奈良の平城京の役所の形のミニチュア版と言いましょうか、それをモデルにして、こういうキチンとした左右対称の配置をした役所形態をもっているですね。

これがもう一つの対策としてとられた大野城と、先の地図で基肄城というのを紹介致しましたが、これも基肄城を遠くから見ますと、非常に山の姿がですね、美しい所でちょっと険しいんで、頂上に行くとかこういう碑文が建っているだけなんで、整備は今の鞠智城の方が進んでいるんですけど、参考までに大野城、基肄城、文献資料で敗戦直後に、朝廷の命令で築かれたお城だと記録がある実態です。それで、ざっと地図で確認をして頂きたいと思います。敗戦後、時間はバラバラになるんですけど、その後、長い時間かけて、すぐにできた城と、長期間かけて造られたのがお分かりと思います。朝鮮半島から進軍した軍隊、對馬と壹岐ですね。對馬には金田城という城が築かれて、大野城、基肄城、鞠智城、この場所によって、あと長門城とかですね。

鬼ノ城(きのじょう)と呼んで最近非常にあの話題になっている城がこちらです。吉野城、不思議な事にあの義経の壇ノ浦の戦いの後にですね、吉野の戦い、やっぱり戦力上古代も中世も同じなのかな、むしろ古代の方が先ですから。吉野城というのがちゃんと築かれていて、更にこれが突破されるとですね、畿内、飛鳥に当時の支配者の拠点があったんですが、その前面を守るのが河内と大和の境に高安城というのが築かれて、ただですね中大兄皇子は何を思ったんでしょうか、やっぱり破られた事を想定したんでしょうか、都がそれまで飛鳥大和か河内を大体こう移動してるだけなんですけど琵琶湖の辺、1回だけ近江大津宮と歴史上いっている都は、やはりこの事件の直後に中大兄皇子が博多湾の沿岸から奥まった所に大宰府を移したと同じように移したのではないかという風に考えております。これあまり良い写真じゃありませんけど、現在の滋賀県大津市、それと発掘調査での宮殿痕の風景で、大宰府政庁痕とあまり変わらないという印象をお持ちだと思います。こういう長方形プランで左右シンメトリーに建物が建っていたわけですね。

これから資料の方に行きますので、お配りしている資料の2枚目の所をちょっとご覧下さい。最初の表です。No2の表ですが。先ほど防ぐという字で防人という意味で説明しましたがけれどもその防人と呼ばれている、軍隊の実態を少しここで説明したいと思います。これは関係ありませんのですいません、この文ではなくて資料を見て下さい。

実はですね、防人がなんで有名かと言いますと、むしろ私どもは万葉集の中に東国防人の歌ってのが沢山編集されて載せられていて、むしろその別離の辛さとかですね、東国からわざわざ九州に赴任しな

ければいけない当時の兵士の悲しみとか辛さとかそういったことで、文学的に万葉集の歌が取り上げられているんですが、私ども歴史的な資料としては実は、その作者の横に付けられている肩書きというのが非常に注目されているわけです。その肩書きを整理したものが、この一覧表だとお考え下さい。何が重要かと言いますと、まず出身国、国名という所を見て下さい。遠江、下に行きます。相模、駿河、上総、常陸、と右の方の方に行きます。下野、下総、信濃、上野、武蔵もうほとんどいわゆる、東国畿内から見て東日本なんですね。で、もうひとつ肩書きでですね。国造丁、一番上の欄見て下さい。国造丁とか国造、助丁、主帳丁、帳丁、それと火の長、火長上丁、そして一番下に防人。実は、今読み上げました肩書きが軍隊編成のですね、これが上から下までの役職名ではないかと考えているんです。こういう軍隊編成でやってきて防人を束ねてたのが国造丁、もしくは国造と呼ばれているリーダーでして、これはですね、今日のテーマではないんですけど、古墳時代からの恐らくその地域の有力者で、大和政権から地域のリーダーと認定をされていた有力者なんですね。で、実はこの時期は国家の基礎が作られつつある時代だと申し上げておりましたが、ここのあのHP、画面の方をちょっと見て頂きたいんですね。

この一覧表はどういう事かと言いますと、国家というものの基本がどういう事が簡単に定義してみると、ある地域を支配者が全部把握して、その地域の中に住んでいる人民をすべて把握して、国家を運営する為には当然、税を集めなければならない。そういうシステムが、恐らく平行して完成に近付きつつあった時期で、その地域を全部束ねるために、恐らくですね、今の関東地域から九州、もう肥後の国あたりがほぼ大和政権には確実に支配下に入っています。南の方の薩摩半島、大隈半島、後でもちょっと話題にしますが、一応従ってますけどご存知の隼人という別称があったくらい別の呼び名で呼ばれる地域なんですね。人種的には日本人でありながら北の人たちには蝦夷、南の地域の人には隼人という独特の呼び方を中央政府はしている。これは言葉を返せばですね、なかなか征服活動が1回では済まないというか、スムーズにあの中央政府の政策が浸透しない地域、という意味があります。どういう政策が執りたいのか、すべての範囲を隙間なく掌握する。つまり、行政区画を整えるという事です。その事で導入されたのが、まず国、国の下に郡、その下に里という三段階のですね、行政区画を執りたいという。それが当時の支配者達が国家を整える、まずしなければいけない。

そして、その中で今度は住んでる人に一人一人戸籍に登録する事を平行してやるんです。そして、戸籍に登録された人達に国家は当時土地をすべて国有、今の言葉で言えば、公の土地としましたから、再配分をする戸籍に付けた人には男女問わず水田を支給する。その代わり税を、必ずこれまた規定どおり水田の税、地方の特産物、さらに労働地代として働く事です。これは主として男性に関わってきます。兵士役も、実はこの体制が整うと、一家の男性達が支払わねばならない税という観念でみれば、まさに血税だったんですね。血で購う税。

もう一つ、平和な時は力役で2ヶ月間ぐらい、まさしく手弁当で労働に従事する三本立てです。水田のお米を出す税、特産物を出す税、それと力役という男女全部係りますけど、総じて律令国家を目指した税制が完成したあかつきには、男性の負担を非常に、計算上は重くなる税になりつつあった時代なんですね。

一例としてここに挙げてますのは、飛鳥の発掘調査で進んでおります、出土物から確認されております行政区画です。記載内容という所を注目して下さい。三野国大野郡阿漏里、三野国大野評堤野里、若狭国小丹評木津部五十戸、とありますけど、恐らくこれは里(さと)と読まないといけないんだと現在解釈されています。意味はですね、里というものが五十戸の家族で編成をされていることが非常に分かる文字なんですね。

里の中には五十戸、これは後の律令の条文、いわゆる法律でもそういうふうに規定されておりますので、その規定を裏付けるのが、天武天皇、持統天皇、中大兄皇子が即位して天智天皇と呼ばれますが、その後に即位したのが弟でありました天武で、その夫人であって皇后であった女性が夫の死後、即位して持統、これ女帝なんですね。言わば、天智、天武という兄弟天皇と、その奥さんであった三人の時代に、おそらく我が国の国家の基礎である地方行政区分というのが、ほぼですね全国的に施行されていたんじゃないかという。先程お見せした山城を必死になって建設させている中で、同時平行で恐らく行政的に、もう1つしなければいけなかった事が、こういうあの内政の整備、外交問題と同時並行で進んでいた、とお考え頂きたいと思います。

それですね。ちょっと今日の結論なんですけど、1つの資料をご紹介します。これはプリントには載せておりませんのでちょっとこちらを。

日本書紀のちょっと古い話になってしまいうんですけど。名前、ご存知でいらっしゃると思います。仁徳天皇、応仁天皇というのは、非常に日本書紀で有名な天皇ですが、その応仁天皇9年4月条にですね、こういう説話が事実かどうかは非常に難しいんですけども。話が載せられています。「竹内宿禰を筑紫に遣して百姓をしむ」、すいませんみせしむです。ちょっと字が一字抜けてます。「時に武内宿禰の弟甘美内、兄を廃てむとして、即天に讃し言さく、」偽りの告げ口をしたということですね。何と言ったか、武内宿禰はですね、常に天下を望む情あり、今聞く筑紫に在りて密に謀りて曰へらく、独り筑紫を裂きて、三韓を招きて己に朝はしめて、遂に天下を有たんというなりと申す。」実は、日本書紀が完成したのは720年前後なんですね。地方の支配者達が自分の国の正式の歴史書を初めて編纂していく過程で、その応仁記を編んでいって、その中に紛れ込ませた説話なんですけど。私などが注目しているのは、中央政権が筑紫、この場合は九州というふうに解釈して頂いていいと。どういうイメージで見てたか、と非常によく分かる資料になっています。

海を挟んで九州という、一種独立した国を治めるというのは、非常にある意味では難しい。常にここが、当時文明の最前線だった中国や朝鮮半島に、むしろこっちの方が近い訳ですから。あの地域は、もう事があると朝鮮半島と同盟をして何か事を企む、つまり、独立をしかねない地域である、というイメージが非常に多く、その日本書紀が編纂された頃にもですねあったという。実はこれには理由がありまして、6世紀の始めくらいに筑紫の、この九州地方では筑紫君磐井という大豪族が、九州の豪族達を糾合して大反乱を起こしておりまして、2年ぐらい中央の外交政策がストップした事件がありました。

恐らく、そういうイメージが100年経っても200年経っても残っていて、それが今日の結論でもあるんですけど確かに朝鮮式山城というのは、その白村江の敗戦後の侵攻を恐れて造られてはいますけど、その危機がなくなった後もですね、山城が存続していく訳でありまして。果たして外交のためだけかというですね、謎としてお考え頂くキーワードにちょっと先にご紹介しておきました。

後は、資料の方を時間がある限り、たくさん紹介していきたいと思いますので。次に紹介しているのは白村江敗戦後の外交状況、ちょっと押さえて下さい。実はですね、喧嘩を、というか戦争をした相手国との間がどうだったかというのを確認してください。

実は、初期の天智4年時を見ますと、665年なんですけど、この年に是歳、これは位です。「小錦守君大石等を大唐に遣す」という記事があるんですね。これは第5回目の遣唐使の派遣の記事なんです。2年前に大敗北を記したような対戦相手の国にちゃんと使いを出す、という事は、これはいわゆる国交

を回復で、遣いを出してるわけですね、いわゆる危機感がありながら、一方ではちゃんと外交使節団を派遣するぐらいの友好関係を回復しつつあると。そのために実はですね、唐・新羅の連合軍は日本に来るよりも、一番の仇敵であった高句麗の方を攻め滅ぼしているんですね。天智七年、日本書紀によると668年に、高麗は、やっぱり大唐の軍勢によって新羅の一番の望むところだった高句麗が滅亡させられて以後、先程お見せした地図では、高句麗、百済、新羅、三国時代の新羅でしたけれども、以降は、統一新羅というふうにお考え下さい。半島の王者として以後君臨していったのは新羅という王朝なんですね。このことも天智七年に向こうの方から使いがやって来たという記事があるんです。という事は危機感がありながら新羅とも統一新羅とも唐ともちゃんと回復はなされているという事です。

じゃあこれを念頭において頂いて、鞠智城の初見史料、日本書紀の天智天皇の665年の記事で、実はですねここは返り点付けておりませんけれども、あの使わす、誰を使わしたかという達率、これはですね百済の官職名なんだそうです、次も変な文字なんですが答本春初、これはこう呼んでおきます百済から白村江の戦いで亡命してきた技術人と解釈されている人物です。この達率、答本春初を遣わして、長門の国で城を築かせた、というんですね。と今度は、達率億礼福留と呼んでおります。達率、四比福夫を遣わして、どこかと筑紫ですね。筑紫に遣わして大野、及び椽の二城を築かしむ。これが、敗戦した2年後あたりに、早速先程紹介した大野城、基肆城というのが造られている。さらに天智六年には、高安城、あの和歌山と河内の国境にあった高安城、讃岐の国の屋島城、対馬の国の金田城というふうに次々に、先程の地図をお見せした史料というのは数年の内にですね、築城命令が出され朝鮮半島から逃げてきた朝鮮式の山城の技術者が、あの自分の国に似せて、適当な土地を選んで建設の指示をしたんだと思います。ですから今日、朝鮮式山城と呼んでる理由は、文献的にはここにあるんですね。あの確かに日本が造っていますが、技術的にはもう朝鮮半島で築かれていた城の形態であるという事です。

そして、日本書紀の持統三年689年、ここにはですね、後ろの方を見て下さい。中央から派遣された人物が、且は新城を監る、というふうにあって。この城が何処のことかっていうのも解釈が難しいんですけど、大野城、基肆城かな、と筑紫で言えばなってます。で、初見史料と書きながら鞠智城の名前は無いではないか、というふうに思われると思います。で、それが次の続日本記、と「ぞく」と読まないで「しょくにほんぎ」と読みならしております。文武二年、西暦698年の5月25日上に、初めて実は鞠智城の名前が登場致します。大宰府して大野、基肆、鞠智の三城をつくろい治めしむ。

謎の一つにもなるんですけど、鞠智城がいつ築城されたかという事になるんですね。これを根拠にすれば、7世紀のもう終わり、しかし、これを終築の記事だ、と読めば当時ですね、建物その他は大体30年位で、実は手を入れないといけない時期だと建築学的には言われておりまして、とすれば前に名前は出てきませんけれども、天智四年の例の8月条にですね、大野城、基肆城が築かれた時あたりに築城命令が出されていてもおかしくない。つまり、私が考古学的な発掘調査で非常に確かめたい事のの一つが、今のあの米原台地の中で、遺物はですね、どれだけ古くまで確認されるか、いつぐらいから鞠智城が存在したと言えるのか、考古学的な見解と、文献を証明する為に、ここが非常に共同作業が必要になってくる訳です。

で、もう一つ、文武三年の記事に「大宰府をして三野、稻積の二城をつくろいしむ」という記事がありまして。この7世紀の後半、文武天皇というのは天武と持統の子供にあたる天皇なんですけど、その時期になって、何で急に城を修築したり新築しなければいけないのか、という問題なんです。この三野城とか稲積城の場所は、推定が難しいんですけど、文献的には、日向の国児湯郡の納郷とか、大隈の国桑原郡の稲積郷、という地名が古代にはありまして、その一帯ではないか。それはなぜかと言いますと、

次の史料に隼人の内乱、反乱の事がすぐ後に起こってくるんですね。だから、もしかしたらそういう予兆を受けて修築しているのかな、というふうに解釈できないわけではないんですけども。

もう一つ、二枚目の一番下をご覧ください。続日本記の和銅六年 713 年 8 月上です。「従五位の下、道公首名、新羅より至る」。あのもう先程は漢字で位を著しておりましたが、律令体制では、一位、二位、三位、四位、五位という数字で、九位まで表すようになって、その呼び方をしております。「従五位下、道公首名新羅より歸る」。国交が回復しておりまして、こうやって留学と言ったらいいいでしょうか、お遣いの他にいろんな人たちが往来をして行ったんですが、その人物が 8 月 26 日、「筑後の守、兼肥後の守に任命さる」。という記事があるんです。

律令国家になって、確実に文献で確認されるこの肥後に、国を管轄した最初の国の守、今で言えば県知事のようなポストにあたるような人物は道公首名です。ただ、現在と違うところは、決して選挙で選ばれた県知事ではなくって、これはもう中央官僚です、機内の大和政権が任命をして派遣した。その最初の人物の経歴がですね、新羅の事を知ってる人が即、筑後と肥後、両方の国司を兼任、任命されてるというのも、私などはやっぱりその部分、注目するんですね。外交問題、山城の事は朝鮮半島に向いていますし、それと同時に、この人物は、律令と呼ばれる法律自体の編纂にも携わった学者なんです。もう、法律を作ったスペシャリストが今度は実践的にあの政治の場で律令体制、隅々に戸籍をつくり、税を集め、地方分権じゃないですけど、地方で地方の結びつきを繋げていかなければいけない、そういう重要な任務、それと外交的には常に半島大陸情勢をにらんだ見識のある人物。そういう人が確実に肥後に最初派遣されている、というのが私には重要じゃないかと思っている訳です。

もう一つ大事なのは、この時に恐らく完成していた地方行政組織、確認してください。もう私たちはよく知っている事ですが、律令体制で肥後の国は、実は 13 郡に分割されていたんです。

この史料はですね、「倭名類聚抄」と読みます。10 世紀初頃に完成した我が国で一番最初の百科事典なんですけど、大変ありがたい史料でして、今日はその史料を引用させてもらっていて。ここには肥後の国に関する 14. 14 郡なんです。ちょっと数字が、私は 13 と言いましたが、違うんじゃないかなと思われると思いますが。10 世紀ぐらいは 14 郡になってたんですが、8 世紀に律令体制が発足した頃は、玉名郡、山鹿郡、菊池は現在私たちが使っている菊池の字ですが。小さい字をご覧ください、ここは平仮名のつもりなんです、読み方です。「久々知」はいですから、これが久々知久々知と言ってるうちに菊池になるんだと思うんですけど、厳密に言えば、当時ひらがなは私たちの常識の発音では「久々知」というふうに。他はですね、山鹿にしろ、玉名にしろ玉名は「多万伊名」になってますね、玉名が縮まった名前だと思います。次、阿蘇も同じです。合志、先「河の志」と書いて「ごうし」と呼んで下さいと言いましたが、当時発音を見ますとね、やっぱり「かわし」という発音が付いてるんで、当て字としては「河の志」とは正しい訳ですね。現在、これは合志郡という発音に変わっております。次に、山本郡はカッコしてあります。これが実は、後で 9 世紀に分割された新郡です。合志郡があんまり広くてですね、現在の植木町一帯は山本郡という郡名で分割の際、据えられたんですね。で、飽田郡、詫麻郡、益城郡、宇土郡、八代郡、天草郡、葦北郡、球磨郡、合計 13 郡が、我が国が国家という体裁をとった時に、肥後の国が組織された行政区分の名称です。

よろしいでしょうか。だから郡名というのは、1300 年近く基本的にはほとんどそのまま伝えられてきています。江戸時代になって、益城も広がったですから、上益城、下益城。それとまた明治以降のいろんな変遷で、山本郡と山鹿郡が一緒になって鹿本郡、詫麻郡と飽田郡が飽託郡、とかいうんですね、

変わりましたが、一応頭文字を取ってます。

これからは非常に古代史を勉強する時、私難しいと思ってます。例の「平成の大合併」、ちょっと名前がですね。簡単に頭文字だけではいけないような名前になってますから、古代史を勉強する時にはこの辺をしっかり押さえておかないと基本的な間違いをするのではないかなと思ってますが。こういうのが国の基礎、これを当時の大和政権、中央政権は、律令という憲法を作りつつ、法律を作り、それを実施して国の基礎を作って行ったんですね。

3.山城関連木簡

No3 に移ります。次、木簡というものをちょっと紹介したいと思います。

木簡というのは分かりやすく言えば木の札です。今も送り状なんかでその名残りで、木を括り付けて送り状なんかにしますけれども。

今、この画面ではですね、調査に入る前の菊鹿町の米原台地の非常に古い写真をちょっと見つけたので、こういう風に牧歌的な段々畑があって、温泉があってひなびた所で、私も私事ですけれど、30数年前に学生時代初めてこういう時に行ったのが、鞠智城との関わりの始まりでした。以降 30 年以上経って、非常に美しく整備が済んでおりますが。これはですね、現在整備をされて、こういう看板なり案内板なりになってるんですけども、与那原集落を挟んで道路がですね、この菊鹿町の菊池のプラザの方から上って行って来るとこの道路があって集落があるんですが、遺跡で見頃の所はここなんで、古楼とか米倉とか、兵舎とか、板倉とか、ここに貯水池とかあって、端っこの土塁線というのが、お城の基本である守りのですね。外と内側を区別する一つの施設で、こういった所は現在歩いて見学できるように、非常に美しく整備されておりまして、ご存知の方はいいんですが、初めての方はこういう風に歩きやすく美しくなっております。

で、問題の木簡がですね、実は貯水池跡と呼ばれる所で、池の跡をですね、テストとか、テストケースで掘ってた時に見つかったものです。左側の木の札をご覧ください。これを歴史的な資料では、木簡というふうに呼んでるんですね。厳密に言えば、木簡の簡は竹冠なんですね。木なのに竹冠はおかしいんじゃないか、それも色々それだけで 1 時間ぐらいお話できるんですが、木簡というように統一して呼んでおりますので、平城京をはじめ、今も全国から万を数えるものが見つかってますが、肥後の国では、確実に古代の木簡と今認定されるのは、偶然、鞠智城から見つかったこの 1 点だけ、という非常に貴重なものなんですね。横にその読み取られた文字も一部図面ですけど挙げてます。皆さんたちの資料の方には、はっきりと書いてあると思います。

あの秦の始皇帝の秦なんですが、当時は「はた」という名称で呼ばれている名前です。「はたひとのおし」、「しのぶ」と読むのか「おし」と読むのか、多分これが人名で、次にちょっと読めない字、壊れてる部分があって、「五斗」という単位が入っておりまして。結論的にはおそらく「米、五斗」と本来文字が書かれていて。この形に注目してください。上の方にここに「えぐり」、入ってますよね。何のための「えぐり」か。当時はですね、紙ももう使われておりますが、紙はとっても貴重だったようで。

しかしですね、律令国家は現在と同じ、全く政治の仕方は「文殊主義」なんです。伝達する時、必ず文殊の交換をする。正式な書類、紙をやっぱりふんだんには使えない時代、中国でもそうだったんですけど。竹、竹簡から木簡になって、やっぱりその東アジアの文明が日本にも届いているわけですね。この木簡の中で、ここに入れてあるのは、多分ですね、「伝票」として括り付けて、その荷物から落っこちないように、確かに私がこのお米五斗を鞠智城まで運んだ本人です、ってね、証明として括り付けた

送り状の形ではないか、というふうに確認をしています。

先に冒頭で説明しましたが、山城の中には武器や食料を貯えて持ちこたえられるように、だから、誰かがお米も運ばないといけないんですけど、律令国家は税を集めるシステムを作り上げておりますので、鞠智城の中にもですね、こういう正式の税を集める時に使われる木簡が見つかって、たった1点だけなんですけど、やはり国家プロジェクトで造られた山城として間違いはないんじゃないかと、文献的なその裏付けにもなっている物です。

まず、木簡。大体こういう形が普通です。ついでに、これ最近見つかって発表になった資料をご紹介します。なんか、これは先程の木簡に比べたらですね、棒切れで途中折れてますし。私の実は知り合いからこういう木簡が見つかった事が1年半か2年半前に聞かされてたのに、新聞発表がされたのがその2年後ぐらいだったんですね。なんでこんなに遅れたのか、私も不思議に思ったんですけど。それはですね、ここの文殊がたくさん書いてあるのは、非常に判読が難しかったんだと思います。これは赤外線撮影、肉眼ではもうどうしてもちょこっとしか見えないんです。ところが、赤外線という独特の方法で検出するとですね、文殊がこんなに浮かび上がってきちゃったという事でしかも、上の方から書いてある。上の方に「一次文殊」と書いてありますね。それとブルーでちょっと入れてあると思います。反対向きに文字が入ってて、もうこれは後で書かれた二次文殊、というふうに発表されているんですね。こういうふうに、文字がゴチャゴチャとなってますから、それを判読していくのに大変時間がかかったんだと思います。

何が重要か、それはここの部分なんです。ここです、甲斐の国のちょっと前後の文字は読めないんですが、この字、干支で言うと「戌」ですね。だけど、これの本当の訓読みは、「守る」とか「守る関所のような場所」、二つ意味があるんですね。だから、これに「人」が付けば当然「守る人」、一字だけだと「じゅず」と呼んでますけど、いわゆる、防御施設、関所を兼ねた防衛施設、山城の他にですね、律令国家は要所要所に勝手に往来をしてはいけないという所には、こういう施設を配置して、やはりそこに防衛する軍人なりを配置した事が考えられるんですけど。

この資料を皆さんに紹介したのは、そこに3ページの配布資料「唐津市中原遺跡出土の木簡」というふうに紹介してると思いますが。これを専門家はですね、「戌人」と読めない字を「人」と読めるという判断をしてまして、これこそあの「防人」、先程紹介したあれと同じ意味で解釈していいんじゃないか。場所もですね、唐津市ですから、玄界灘の松浦郡方面なんですね。それであの防人は有名なんです。東国地方から徴集された軍隊だ、という話までは、ちょっとして話はそこまでになってたと思います。

現在、歴史研究家はですね、わざわざこの防衛の最前線、壱岐島や北九州にどういう訳か西日本の兵隊ではなく、東国出身の軍隊を配備したのではないかと、それを私どもは防人というふうに呼んでるんですね。だから、それは色々学説があります。何故かという、先程の応仁記で反乱を起こしやすい場所という記事を紹介しましたように、ここにはですね、緊急事態の時に向こうとくっつかれては、半島の勢力と同盟してむしろ内乱を起こされては困る、と思惑があって、東国から全く九州と関係が無い軍人を配置して、言わば一種の防波堤にしたという説が一つ。

それと私なんかはむしろですね。白村江の戦いで出陣した軍隊の多くが西日本から徴集されていて、その中で多くの犠牲者が。戦死者や先程の捕虜、抑留された人たちの例も話しましたように、沢山の犠牲者を出していたのが西日本で、そこから更に、防衛のためとはいえ軍隊を組織する再徴兵をやることは、やはり何らかの抵抗が起きる、と予想したんじゃないかと。

だから、新手の無傷で残しておいた東日本の軍隊を配備したのが、その東国防人ではないかと思うんですね。この習慣がこの後もずっと奈良時代になっても実は続いて行くんです、不思議な事に。西日本の軍隊に後では切り替えますけど。防人といえば東国から、わざわざですよ、集めて大阪から船に乗って来て大宰府まで運んで、それから壱岐島とか。ただですね、壱岐島やどこの島までには防人がいたことは判るんですが、その後には具体的に何処にいたのかは判らないんです。

謎のもう一つなんですね。だから、この時築かれた金田城とか、大野城とか、基肆城には初期にはもしかしたら、配備されてたかもしれないんですけど。でも、これも木簡でですね、はっきり防人に食料支給したとかですね、そういうのが出てくれば実証できると思うんですが。この中原遺跡で出土したのは、防人がやはりこの唐津湾沿岸にここで集められて、もう一度どこか最前線に配備されたのかもしれないんですけど、やはり防人やこの戍人と呼ばれる防衛軍のですね、集結地があったという事を最低、木簡から言えるので、有名な防人ですが、なかなかその具体的な配備先とか生活というのが、万葉集からしかうかがえなかったのを補う重要な資料ですので皆さん方に紹介をしておきました。

それとですね、その木簡の資料に挟まれて真ん中に大宰府の調査で見つかった。山城関係の木簡も一例紹介しております、これはもう文言のところだけ、ちょっとですね文章が多いんですが、「筑前、筑後、肥後等の国班給するために、次が重要ですね基肆城の稲穀をつかわし」というふうに今解説しています。

ということは、大野城、基肆城にやはり備蓄米が存在していた、という事を裏付ける木簡資料なんです。で、鞠智城の先程の木簡、米五斗、一人の納める量は五斗でも、それがたくさん集まると一つの倉の中にですね、貯えられるほどの量になっていたというふうに考えられるものです。

それとですね、ちょっと変な写真ですけど、これは米原台地で水田や畑を持っておられる方たちが、実は耕作するする度にですね、こういう遺物が出ていたんです。これも実は、ここに古代の山城が存在したんじゃないか、という発掘前の所望の一つだったわけですが。火を受けています。炭化したお米が、あの台地上いたる所からなにか見つかるというというので。ちょこっとならですね、資料にならないんですけど、こういうものがこの砦の中に収められていて、後の資料でですね、その倉が重囲中火災で焼失したっていう記事があるんですよ、だから私なんかはこの焼き米なんかは貯えられて焼失したのが今あの台地上に層としてですね残って大量のお米がやっぱりあったのかなと、調査の前思ってたんですけど、最近はですね、こういうものに科学的な分析を加えるんで、推定から科学的なその色んな結論が出てきている時代になってきたんです。どうもこの炭化米は時期がですね、古い7世紀の終わりから8世紀ぐらい。つまり、鞠智城ができたてで、30年くらい経ったのか、機能していた一番のあの外交問題と絡む時期ぐらいに貯えられたお米らしいという。そういうところなんですが、こういうものがあるという事です。

これも行かれた方はご存知かと思いますが、あの発掘調査で穴だけがポコポコポコポコ出て来ますから、それをこういう風に復元をして、分かりやすくイラストでやっているんですけど。ついでだから。ご存知だと思います、これ八角形のものでした発見したのはこういう変な穴ポコなんですけど、それは多分この八角形の...、後の資料に太鼓の音が自然に響いたというような記事が出てくるんですけど、これは現代の想像復元図なんです。太鼓の音なども案内板の中に組み込んで、こういう状況かなというのを皆さん達に案内してるんです。

これは草葺きの倉ですね。こちらがお米などを蓄えた倉としては、こういうものが想定されています。奈良にあります正倉院の校倉造というものをモデルにしてありまして。こういうものが律令国家では全

国各地、郡単位で、こういう倉を造って税として集めたお米を地域で蓄える。で、これは「不動倉」と言いまして、普通は動かしてはいけない、カギを開けてはいけない、備蓄米だったんです。常に出し入れする倉は別途、「動用倉」という言い方をするんですが、「不動倉」としてカギが掛けられていて、普通の人は開けないで役人がいざという時に開ける。そういうのを鞠智城に行きますと実感できます。こういう簡単な建物には兵士が配属された、一番上の人たちは倉の方に、建物として立派なというのが分かります。じゃあ、史料の方に戻ります。

4.軍団構成と兵士装備

3枚目の資料ですね。ちょっと急ぎますけども。その防人と並んで律令国家を作り上げた軍事組織、軍団というふうに呼んでおります。その軍団の事をちょっと紹介したいと思います。

奈良の平城京の調査で、実は木簡が見つかった時に、「肥後の国、第三益城軍団、養老七年、兵士歴名帳」という文字が、その平城京で見つかった木簡から読み取られたんですね。これは何を指しているかと言うと、律令制度が作り上げた地方の一般の人達が義務として、当時は軍団に何年か必ず行って軍事訓練を受けなければいけない、そういう場所を「軍団」と言いまして。肥後の国で、これはですね、第三益城郡に軍団があった事が判りますが、その集められた兵士の名前が中央に報告された時ですね、丁度あの軸、床の間に掛けますお軸のような形で届けられて、その漢字の名前の部分には、絹か紙だったと思います、残っていませんが、軸帯だけが残ってた非常に貴重な例です。で、肥後の国や九州にどういった軍団があったか、名前は分かるのは少ないんです。だから、これは貴重なものなんです。他の資料から九州の軍団の数が分かります。

それが「類聚三代格」、弘仁四年の資料なんですね。813年の記録によると、九州、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、肥後をご覧下さい。4千人の兵士が団4つ、軍団4つに分けられて集められていたんですね。しかし、この命令書は、それを今後は2千人減らせという命令なんです。で、合計すると肥後は2千人。ただし、団の数は変えない、というのが筑前の例で判るんです。筑前も団4つ4千人、筑後は団3つで3千人、豊前が2千人、豊後1千6百人、2千5百人というふうなんです。

こういう兵隊さんたちは実態は農民なんですけど、何年間かは義務として、税の一種として軍事訓練を受けて、内乱が起きた時も出動しますし、朝鮮半島で戦争が起こればそこで外征軍として編成をされる。平時の時に都の守りに付く人たちはいわゆる「衛士」と呼ばれて、九州の守りに就いていた人たちが「防人」というふうに、独特の言い方で呼ばれていた訳なんです。肥後の国に軍団がいて誰が山城を守ったかという、防人が派遣されていたのか、地元で徴集されて訓練を受けたこういう兵士が定期的に配備されていたのか、そういう事を考える時の手がかりとして資料を紹介してきました。

No4 をご覧下さい。それが今の画面に載ってますけれども。もし鞠智城に配備されたとしたら、こういう兵舎で生活をして、この広い範囲をですね軍事訓練して、暇な時はあの築城敗れた所を修理したり補修したりするのも仕事だった、というふうに記録があります。

5.隼人の叛乱と最前線肥後

それとですね、この4ページの問題は、隼人のいわゆる内乱問題を取り上げたいと思います。この外交に絡んだ山城の中に、特に九州の鞠智城はですね、内乱の問題とも絡むんじゃないかという事で、隼人の反乱に備えるためという大きな学説もあるぐらいなのでね。その理由を資料で紹介しております。

続日本記の大宝二年。簡単ですが、No3 のところから No4 に繋がるんですけども。隼人を討つと

かですね、隼人を討伐する時に功績のあった軍人たちに勲位を与えとか、そういう記事が8世紀初頭に何条か見受けられます。

それを裏付けるかのように、No4の上の方です。大宝二年の筑前の国の島郡川邊里に住んでいた住人の中に、勲位を戸籍上書かれている人物が何人か検出出来るんです。例えば「戸主、追正八位の上、勲十等、肥の君の猪手、年53歳、正丁大領」、肥後の出身の豪族だと思いますが、不思議な事にいつの頃からか筑前の島郡（今の糸島半島、前原市付近です）に移住してて、そこで「大領」というですね、軍の最高級の地位にまでなるような有力者がいて、その人物と家族には「勲十等」という肩書きが付いているんですね。これ戸籍ですから、住民登録をした時にちゃんとここまで記録されている。おそらくこの勲位は、薩摩の隼人が反乱した時に従軍した事による勲位ではないか、という解釈が今されているんですね。他に、豊前の国の上三毛郡の戸籍にも、「勲十一等、塔岐弥」とか「勲十等、狭度勝与曾弥」とか、こういう戸籍の中に勲位を与えられていた。これは恐らく、大隈半島、大隈隼人ですね。鹿児島は広いもんですから、薩摩隼人と大隈隼人と呼び分けておりまして。ちょうど、肥後と備前豊後の方は、海を伝って両面作戦で反乱が起きてる時に、陸上と海上から行く挟み撃ち作戦もやったんじゃないかと思いますが。両方の戸籍にこういうふうに勲位を持っている人物、その恐らく鹿児島地域の内乱の時の叙勲の結果ではないかと考えています。これが1回目です。もう一回目がですね、その資料で言うと、2と番号を付けてる資料にちょっと見て頂くと。養老四年720年に再び反乱が起きてるんです。

1回目は、あの武力で討伐して治まったかなと思ったら、720年に再び隼人反して大隈の国守、陽侯史麻呂を殺害する。これが一つの烽火になって内乱に発展したために、2-2、大伴宿禰旅人を中央政府は総大将にしてこの内乱を収めるための追討軍を組織する。2-3を見て頂くと、721年には結果として反乱者の斬首ですね。殺した人とか捕虜合わせて、合計1400人あまりの戦勝が中央政權に報告されている。それ以降実は隼人に関しては内乱の記事は、国の正史にはあまり出てこなくなるんですね。だから、あれほど古墳時代以来難しかった地域も、大体8世紀の前半ぐらいには一段落をする。それに実は大きな役割を果たしていたのが、やっぱり、肥後の国の住民や有力者ではないか、というのが、ちょっと間に挟んである資料飛ばしたんですが。

例えば、和銅七年3月の記事ですね、「隼人は昏荒、くらく荒々しい」というわけですね、文明に対しては全く暗くて、「野心未だ憲法習わず」、これは律令の事です、国家の基本法典を学ぼうとしない、定住しないで反乱を繰り返す、というのが支配者側から見た隼人象でしたけれど、「因りて豊前の国の民二百戸移して、相勧め導かせしむ」、というですね、いわばモデル村落というんですか、律令国家のモデル村落はこういうのですよ、定住して、真面目に農作業やって、税を納めて、あなたたちは移動して、収容をやってそういう生活をしてた人に定住を強制するわけですから、反乱が繰り返されていた。しかし、国家としてはこれが大きなやっぱり支配を完成するための武力でも納めなければいけない。内乱で、まず移住作戦ですね。

力で抑えた後は、モデル住宅を使ってその地域の人たちにお手本を示す。で、この例と同じ事が肥後でも考えられるのが、「倭名類聚鈔」なんです。この薩摩の国ですね、郡名と郷名、これは郷というのは里の事なんです。調べている時に、不思議な事に私の恩師なんかが気付いたんですね。薩摩の国の郡名なのに、郷名なのに、合志郷、飽田郷、鬱木郷、宇土郷、新田郷、詫麻郷、まるで熊本の人は何か熊本の郡名を聞いているように思いますよね、だけど、薩摩の国の行政組織の一番下の里、この時代では、漢字では「郷」と当てているんですが、6郷のうちに4つまでもが肥後の郡名に一致する。

という事は、前の資料と合わせて考えれば、肥後の国からもこういうふうに、郡から50戸ぐらいの

単位で人々が、やっぱり鹿児島の方に移って、モデル村落で開拓の最前線に立って、というような事ですね、移されていたという事が判りますし、更に天平八年度の薩摩国正税帳。これはですね、地域の収支決算書と思って下さい。その地域の税で集めたものと、支出したものを、毎年毎年書いて中央政府に文書で連絡する。正税帳の中に鹿児島の出水郡と高木郡です。ですいません、資料の「出水郡、大領外正六位下勲七等肥君」、ここも意外な事に、熊本の芦北と一番隣を指す、境背します出水には、その名前にですね、なんと「熊本の肥君」というのは熊本の豪族の一族と思われるんです。そういう人物が送り込まれていたとしか解釈できない資料なんですね。次は、薩摩郡と書いてしまいましたが、すいません、これ高木郡の間違いで訂正して下さい。その中にも主帳、これ郡司、郡に4人いる中の4人目の郡司なんです。「外少初位上勲十二等肥君広竜」、ここにも肥君一族が送り込まれている事が確認できる資料なんですね。

こういう事から内乱が起きると、肥後の国は特に鹿児島に一番接していますから、住民も移住させられるし、地域の有力者も指導者として移されているという。後に、江戸時代になっても、実は肥後藩は薩摩島付けの押さえとして、細川家は非常に、その重役を担わされていたわけですけども。古代にそういう政策が完成していたという事が判ります。

それとですね、こういった内乱のために、いざ反乱が起きた時に隼人から攻め込まれた時に、鞠智城で、という説の有力なものあるんですけど。それにしても、少し距離的にですね、あの葦北とか球磨郡とか、ここが最前線になるんでして、それと国府があった。

飽田郡とか球磨郡を突破して、更に菊池川を越えて、福岡、筑後の国境地帯にある鞠智城というのは、作戦的にどうかなという気にもするんですけど、ただ内乱という観点から見たら鞠智城というのはそういう意味では考える時、私はキーワードになると思うんですね。その内乱の本当に中央政府が恐れていたのは、薩摩というのは、古墳時代からなんですけど、本当は私自信は応仁記にあるように、九州地域は何か中央政府の政策に不満があったりすると、どうしても外国の勢力と結合して、独立とか反乱を起こしやすい、特に律令国家の基礎を九州でやってる時に全ての土地を把握して押さえますから、地域の有力者達というのは言わば自分の財産が押さえ込まれていく事になりますから、反乱が起きてもおかしくない状況にあったのを、中央政府はある程度想定して、鎖と言うんでしょうか、そういう位置にかつてですね、筑紫君磐井は豊の国や肥の国の豪族を語らって反乱を起こしてるんですね、やっぱりそういうイメージが強いですから、鞠智城も考えてみれば、大分県の方にも向けられる。それと筑後、八女地方にも向けられる、と肥後全体にもらめる。

まさしく“三国の境界”に位置しているんですね。だから、ちょっと奥まっている意味は、海外の後方支援も出来るけれども、その内乱が起こった時に、三方にいろんな連絡なり補給基地求めて、その大宰府を援護する、ようなですね。そういう位置かなという風に、それは今のところ私の仮定なものですから、今全然証明などは、これからいろんな資料がないと出来ないんですけど、8世紀は外圧で出来た山城が内乱の押さえなんかに用いられていてもおかしくない。

6. 8世紀の対新羅対策と山城築城

一方ですね、今度はあの新羅との関係なんですね。8世紀にもやはりトラブルが起きてます。統一新羅との間には、やっぱり緊張関係が続いて、ちょっと端折りますけども玄界灘方面、糸島郡の怡土という地域にですね、前原市に当たるんですが、怡土城と呼ばれる山城が、この奈良時代の、私たちには何か平和の花の都の時代と思いますが、新羅との関係で築城命令が出されて。

7. 怡土城

No5。七の怡土城の見出しの4つ、4と番号の付いてる資料。すいません急ぎますが。

続日本紀の「神護景雲二年 768 年に筑前の国の怡土城成る」、ここで建築が完成したというのでしょうか。命令が出されたのは 756 年ぐらいですから、10 年以上かけてそれが実際に完成するまでの時間がかかっているんですね。具体的に築城命令が出て完成するまでの時間経過っていうの、鞠智城なんかを考える時に参考の資料としてここにあげておきましたが、同時に奈良時代の外交問題というのは、新羅となかなかうまくいかないという事なんですね。

8. 九世紀の山城

同じく 9 世紀に入ります。山城はいつまで存続したか。8 世紀には、不思議な事に大野城も、基肆城も、鞠智城も一切記述が無いんです。100 年以上も、不思議なんですね、で、怡土城の話は出るんですけども、すでに築城されていた金田城とか、大野城とか、基肆城とか、鞠智城の話は出てこない。突然この 3 つの資料がですね、再び記録に登場するのが 9 世紀、平安時代に入ってからなんです。それが、8 番と 9 番に最後に紹介しておきたい資料です。

まず、基肆城なんですけどね、日本後記と読みます。この資料の弘仁四年を見ますと、「基肆団の校尉」というのをちょっと注目しておいて下さい。これはですね、軍団のリーダーの役職の一つが「校尉」なんです。で、基肆団に軍団がそのためあった

というのが判ります。あの基肆城があるところに、実は軍団も併設されていた可能性、先程、肥後の軍団の話をした時に申しませんでしたけれども、私などは、鞠智城があった菊池郡にも 4 つの軍団のうちの一つが設置されていて、いつでも軍人を配備できるようにしてたんじゃないか、と思うんですね。それを文章で裏付ける時に、私などはこの基肆団の基肆城があったところに基肆団があった、という文献的な資料を一つの傍証にしている訳です。この時、やっぱり新羅がですね。100 人あまり 5 艘の船に乗って、沖から島に近付いちゃって、住民の人たちを殺したというのはですね、非常に恐ろしい記事があって、こちらも防戦して、いよいよ新羅がですねこういうふうにして、いつも向こうから襲撃というか、攻撃をかけてくる記事が多いんですね。

三代実録の貞観八年、これも肥前の話なんですけど。ここで注目して頂きたいのはですね。ちょっと読みましょうか。「肥前の国、基肆郡人川邊豊穂」という人物が大宰府に報告した訳です。どういうことか、この基肆郡の擬大領山春永という人物が、その豊穂という密告、というか報告した人に相談してこういう事を言ったというんです。新羅人の玆寶長とともに新羅の国に渡って、向こうの国でどの兵器器ですね、兵器、最新の兵器や機械を造る技術を、そのすいません、造るの前の変な字になってますけど「教」に訂正して下さい、教える、教師の教です。学んでですね、身に付けて帰ってこようではないか、そして帰ってきたらこれが恐ろしいんですね。對馬嶋を私達で占領して、自分たちのものにしようではないかと、そういう相談を受けましたので、ビックリして大宰府にその報告をしてるんですね。で、藤津郡の領葛津貞津とか高来郡の大刀主とか、彼杵郡の永岡藤津なんか、これみんなあの共犯者です。

そうしますと、あの例の烽火台のところで見ましたようにね、高来郡、藤津郡あたりというのは、やっぱりこのころ、平安時代になってもやっぱり、新羅とは、何かこう通行するルートをこの地域の人達は持ってて、中央政府からみたら、勝手に外交とか、商売をやるとかですね、自分達のルールに従わない、それがいずれか反乱みたいな事に繋がるという。そういう事を大宰府は、非常に神経質に報告を受

け取って、中央政府に更に報告をする。

こういう新羅との間には、絶えずその危機があって、大野城もそうなんですね、突然 9 世紀に資料があると、大野城の鼓峰で仏像を安置して、お坊さんたちに守護をさせたりするのはいいんですけど、そこで、ちょっと阿蘇の阿蘇神が怪奇現象を起こしたために、中央政府で占ったところ、それは天災、それとお隣の隣国からの軍事的な問題とか、そういう占いの結果をですね、不思議な現象と引っかけて、いってくるというような、そういう記事で大野城が登場してきます。

それと、5 番目の一番下は、その大野城に何人ぐらいの衛卒と言いましょうか、兵士が配備されていたか、分かる史料なもんですから、これはですね、これは原文ではなくって、翻訳しておきました。築字を訳しましたのでちょっと日本語としてはおかしいんですけど、おかしい所がありますが。衛卒が 40 人いて、一月の食料米が 24 石であったというようなね。そういうことが分かる、非常に面白い記事なもんですから、参考までに、ちゃんと大野城この時点まで機能してたんだ、ということで。100 年余り記録に消えていたお城が、再び平安時代に新羅と緊張関係が起これと、こういう前面に登場する。

で、いよいよ最後の今日の締めめの所ですね。菊池の太鼓のは、何故響き渡るかと、己づから鳴るか、という問題になるんですけど、鞠智城が再び登場してくる時は、菊池城の兵庫の太鼓が、自ら鳴るとかまた鳴るとかですね。

2 番目の資料で、菊池城院の兵庫がまた太鼓が鳴っちゃったとか、そこの不動倉十一宇火付けり。これが先程お見せした、私なんかは焼米に繋がればいいなと思ってるとお話したと思いますが。鑑定結果は、ちょっと焼米がですね、今黒く出ちゃってるんで、ただ重囲中にびっしり入ってれば、台地上に焼米が残っても不思議ないんですけど。これから少し検討課題なんですね。

それと 3 番目はですね、今度は鳥がですね、玉名郡の方の役所のお倉の上に集まって、西の方を向いて鳴いたとかね、これは、やっぱり怪奇現象なんですね。西の方というと、要するに肥前を跳び越して、朝鮮半島の方をある意味では暗示するような言葉です。それと菊池城、菊池郡の倉の倉舎の葺草ですね。これは鞠智城なのか、菊池役所の倉庫の葺き屋根か、わかりませんが鳥が止まってクチバシでですね、盛んに引き抜いた、というこれまた不思議な現象の記事ですね。

で、4 番目が菊池郡の城院の兵庫の戸です。今度は太鼓じゃなくて、戸がまたガタガタガタと、誰も鳴らしてないのに鳴ったと、いずれも不思議な記事なんですね。怪奇な現象が突如 8 世紀の後半になると登場してる。私は先程言いましたように、

9. 九世紀後半の新羅問題

9 世紀の新羅との緊張関係で、9 番目、ちょっと時間がありませんけれども、對馬に配備されていた軍人から、遠い新羅から、1 日 3 回大太鼓の音が聞こえてくるというわけですね。これは、おそらく軍事訓練なんかやってる音だと思って、ビックリしたんでしょう。それを大宰府に報告して、何とか軍備を増強してもらわないと、今對馬はですね弘仁年間に起きた流行病のために有力な兵士となる人口がほとんどいなくなって、ここを急に襲われたらどうする事も出来ないという、悲痛な依頼が中央政府に出された、その資料なんです。

そういう事で、大変なのに、貞観十一年には、今度は新羅のですね、海賊とはっきり書いてます。この船が、堂々と博多湾に押し入って、豊前から運ばれてきた年貢の荷物を略奪して逃げていって、追っただけ捕まえる事が出来なかったという、非常にちょっと情けない記事なんですね。

かくも、軍備が、ちょっと弛んでるといふか落ちているといふか、油断しているといふか、そういう

事を思わせる記事ですが、新羅人がやってくるので、肥後の国では、最後の記事を見てもらおうと、天草に漂着をしたり2つめはですね、八代郡の今度は倉の上に鳥が集まったり、それと宇土郡の神社の前の川の水が突然真っ赤に変わってしまった、とかですね。野山が急に枯れてまるで冬のようになったとか、これまた怪奇現象。

私などは一連の記事はですね、新羅というものをもうすっかり忘れかけていた時に、突然こういう危機感を支配者層がもって、一般の人達にも軍備の必要を説くために、こういう怪奇現象を利用して、危機感をやっぱり広く知らせる、という事で使われたんじゃないかな、というふうに思ってるんですね。それで、その鞠智城は、879年の三代実録という、国家が編纂した正史の元慶三年、この記事 最後に、全く記録の中からはもう消えていってしまうんですね。

10世紀になりますと、実は唐が滅ぶ、それと新羅が滅んで、朝鮮半島では新しく別の王朝が起きますので、今まで必死で畿内の律令国家の最大の外交問題だった新羅との問題は向こうの方が王朝として滅びましたので無くなるんですけど、それでもその後は刀伊が博多湾に入港して来る時は、この古代の軍事制度では全く歯が立たないで、個人的な武士団みたいなものが歴史上に登場するように切り替わります。

最後に

あんなに立派な施設なのに、始まった事も終わった事も記録に無いものですから、皆さん方と関連資料をなるべく古代資料の中から集めて、総合的に数々の疑問にどういうふうに答えを出していくか、興味のある方はどうぞ今日お配りした資料をもとに考え直して頂けたら有難いと思います。結論はあまり出ませんが。一応話はこれで終わらせて頂きたいと思います。